

Global Session 11月のお知らせ

期日:2020年11月14日(土) 10:30~12:00

場所:ガレリア3階 会議室

ゲスト:村田 英克さん

(JT 生命誌研究館 表現を通して生きものを考えるセクター チーフ)

コーディネーター:募集中

参加費:600円

参加人数:およそ10名(コロナ禍のため)

申し込み:メールで (kiyomi-kojima@gaia.eonet.ne.jp)

村田英克さんをゲストにするのは、2回目です。また、2019年度には、ガレリアの事業としてジュニアワールドフェスタを開催しましたが、そのゲストでもありました。

今回も、村田さんが、この仕事に関わられることになったことから、現在の「生きるって何？」を表現する仕事をされての映像を通してのセッションです。

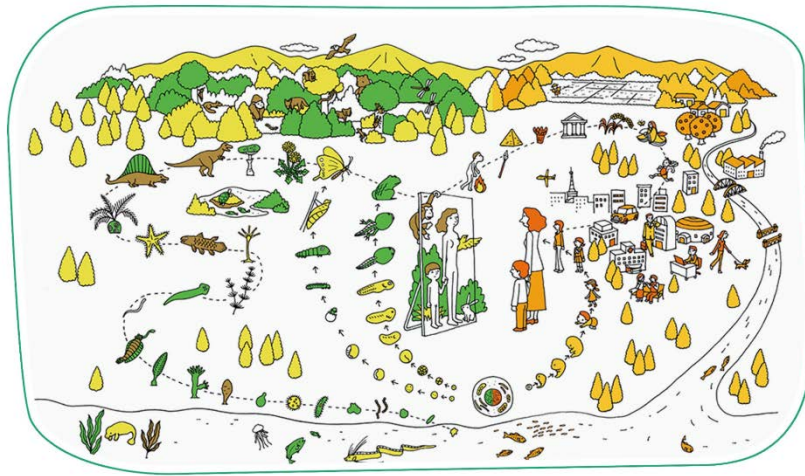
日本語ですし、小学性から大学生の若者まで、おもしろいお話になると思います。現在、アメリカでも日本でも政治を含めて暮らしの不安は起こってきています。それに、コロナが入っているので、自分の気持ちを出す場が必要かと思います。

ぜひ、ひとりでも、お友達とでもおいでください。待っています。(児嶋きよみ)

「2020年に、表現を通して生きものを考える。」

11/14(土)にお話をさせていただく生命誌研究館の村田英克です。一年ほど前のセッションに続き「表現を通して生きものを考える」という私の仕事について、またこの仕事に携わり日々思う個人的な考えについてお話をさせていただきたいと思います。

生命誌研究館は小さな組織でメンバーは30人くらい。生物学の実験研究を行う4つの研究室と、私たち表現の部門からなります。連携大学院として学生さんも受け入れます。チョウやクモ、コバチやカエルなど身近な小さな生きものを研究し、誰もが楽しめる展示や映像などの形で研究を表現し、皆に「生きもの」、「生きていること」について考えてもらう。そのような“場”を創出する活動をしています。



生きものたちの
物語に耳をかたむけると…

生きもの研究から見えてくる世界は、
多様な生きものたちの「生きる知恵」に溢れています。
そこから、人工の世界とは違う、
自然そのものが生み出す「生きものらしさ」が見えてきます。

「生きているとはどういうことか？」これは誰もが抱く「問い」だと思います。これにいか
に答えるか、どのような手応えを求めるかは一人ひとりの人生そのものと言えるようにも思
います。生命誌研究館の活動としては、この問いに対して、現代の生命科学の知見<
“DNA”や“細胞”の理解>を足場に考えをスタートさせて、多様な学術・芸術、さらに日
常生活に透つる「共通理解」を得たい、形成したい。そして生命現象(生きていること)
を大切にす社会を、経済や競争でなく「生命のありよう」を基盤とする文化を希求する。
一人ひとりの中にあるそのような心に「起きてください、朝ですよ」と呼びかけてまわる。
研究館で行っている表現とはそんな感じではないかと思ひます。



「表現を通して生きものを考える」という私たちの活動は、研究館に大きな独自性を
与えています。これは「コミュニケーション」でも「広報」でもありません、「表現する」ので
す。ふつう研究・教育機関では広報やコミュニケーション活動を行うのが一般的です。
科学の啓蒙や、研究成果のアピールとして、社会にインパクトを与える情報発信を組織

的に展開し、自組織の正当性を主張するのが「広報」です。多くの場合、それによってスポンサーの支援を得るのがその目的です。私たちの仕事はそうではありません。広報やコミュニケーションと「表現」の違いは何か？ 私が思うに「表現」の根本にある力とは当事者の中に捉えられる、表現せずにはおられない「やむにやまれぬもの」です。「客観（普遍性）」という価値が支配しがちな科学という人間の営みにおいて、いかに「主観（独自性）」本来の尊さ、その輝きを取り戻す作業であるかとも思います。一般に社会の側も、科学には「成果」や「わかったこと」を求める場合が多いようですが、研究で大切なのは結果よりもそこに至る「プロセス」であり、科学にとって「わかる」ことよりもまだ「わからない」ことの把握が重要です。「結果と過程」を、「わかることとわからんこと」を、一義的にある時点で整理してしまわず、両義的に、矛盾を、動的に矛盾するまま抱え込む形で示せるのは「広報（情報）」でなく「表現（作品）」であり、そこにしか可能性がないように思います。

今年はヒトに感染する新型コロナウイルスの出現により(初めてでない)人間社会が揺らいでいます。その基盤を支える価値観に「？」が付いた。ウイルスは、いわゆる「生きもの」とは異なる存在です。では、生きものってそもそも何？ 実は、誰も正確に答えられません。私たちにはわからないけれども、どのようにしてか生命は 38 億年の間、誕生以来途切れることなく今に続く実績があるわけです。ウイルスは生きものではないけれども、私たちヒトを含む生きものとの密接に関わる存在です。コロナ禍の中で、今年は研究館もいつもと違う一年を送っています。その具体的な報告を通して「生きている」ということを考えるお話しになればと思っています。よろしくお願ひします。

JT 生命誌研究館
表現を通して生きものを考えるセクター